

アウトリーチ型キャリア教育の実践に関する研究：
出張講座を通じた学校と地域の連携を推進する授業
実践の検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 保寿, 酒井, 郷平, 田中, 奈津子, 中村, 美智太郎, 島田, 桂吾, 三ツ谷, 三善 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009468

アウトリーチ型キャリア教育の実践に関する研究

－出張講座を通じた学校と地域の連携を推進する授業実践の検証－

山崎 保寿（静岡大学大学院教育学領域）

酒井 郷平（静岡大学大学院教育学研究科）

田中 奈津子（静岡大学大学院教育学領域）

中村 美智太郎（静岡大学大学院教育学領域）

島田 桂吾（静岡大学大学院教育学領域）

三ッ谷 三善（静岡大学大学院教育学領域）

1. 本研究の背景と課題の設定

我が国では、経済・産業構造の変化やそれに伴う雇用形態の多様化などを背景として、若者の進路に関する状況が大きく変容している。少子・高齢化が加速するとともに社会全体が複雑化・多様化する中で、フリーター、ニートの問題をはじめ、早期離職、ワーキングプアなどの問題が社会問題化している。

こうした問題に対して、第2期教育振興基本計画では、社会的・職業的自立に必要な能力を育成するために、幼児期の教育から高等教育まで各学校段階を通じた体系的・系統的なキャリア教育を充実することが基本施策として示されている。とりわけ、中学生の段階は、将来の進路を具体的に考え始める重要な時期であり、発達段階に応じたキャリア教育が必要とされている。

しかし、キャリア教育は教科としての位置付けがなされておらず、その指導方法・内容には多くの課題が残されている。キャリア教育の方法・内容に関する具体的なモデルを提示することは、教科開発学において教育学と教科学とを架橋する教育環境学に属する課題であると言える。

そこで、筆者らは、中学校教員の多忙化の現状に配慮し、大学の人的・専門的資源に基づいたアウトリーチ型のキャリア教育を静岡県掛川市に所在するS中学校の2年生38名（内欠席1名）に対して実践することにした。本実践は、生徒の将来の夢に向けて、その実現のプロセスを明確にする活動を行うことを目的としたものである。保護者および地域住民のボランティア、大学院生が支援者として加わることで、生

徒の気持ちに寄り添った活動を進めることを主旨としている。また、保護者および地域住民が、この講座に参画することを通して、学校の教育活動への参画意識を高めることも本実践の目的の一つにしている。

このように、本実践は、アウトリーチ型、保護者・地域住民の協力、大学教員・院生の参画といった複合的な方法を取り入れている。そのため、本実践の効果に関する検証方法についても、量的分析とともに質的分析も併用して多面的な観点から検証することを心掛けた。

筆者らは、本実践に先立ち、S中学校区において、キャリア教育プロジェクトの一環として、「親子で夢づくり講座」を2014年12月7日に実施した¹⁾。会場は、静岡県掛川市H地域生涯学習センターであり、参加者は、5家族11名であった。この「親子で夢づくり講座」を先行実践として、その検証のもとに本実践を行ったものである。なお、本実践を行ったS中学校は、1955年に統合により開設しており、2015年度現在は各学年1学級で全生徒数は合計97名（1年生36名・2年生38名・3年生23名）である。

（山崎保寿）

2. 本研究の位置付けと目的

2.1. 本研究の位置付け

文部科学省では「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」（文部科学省 2006）を推進し、現行学習指導要領では各教科や特別活動等でキャリア教育を実施すること

が示されている。例えば、日本キャリア教育学会が刊行する『キャリア教育研究』に 2010 年～2015 年までに掲載された論文の中で中学校を対象としたものは 4 本あるが、うち 3 本は授業や職場体験活動を通じて職業観の変容や進路選択の動機等を分析したものである(米川・津田 2010, 山田 2011, 山田 2014)。中学校の教科単位と関連づけたキャリア教育実践研究においても同様の傾向が見られる(小松 2011, 萱野他 2011, 橋本 2011 など)。その点、辰巳(2013)はカリキュラムマネジメントの視点からキャリア教育の達成状況得点を調査し「生徒の実態やニーズの把握・課題の明確化」が最も影響があるという指摘は示唆に富む。しかし、日本の中学校教員の多忙化が非常に高い状況においては(国立教育政策研究所 2014)、地域連携型キャリア教育(臼木・田中 2009)だけではなく、中学校外の機関が参画する「アウトリーチ」が有効であると考えられる。

アウトリーチの定義を整理した林(2013)は、1990 年代後半にアウトリーチという言葉を入力した際に、「出向いて行う活動」という狭義の意味と「教育普及活動」という広義の意味で捉えられたと説明している。本研究では林(2013)の指摘をふまえ「アウトリーチ型キャリア教育」を「大学の人的・専門的資源に基づいて学校現場へ出向いて行うキャリア教育普及活動」と位置づけることにする。

中学校の教科単位と関連づけたキャリア教育実践研究としては、理科を中核にした小松(2011)や萱野他(2011)、社会を中核にした橋本(2011)などがあるが、いずれも教科単位として実施されていることから、将来の進路を具体的に考える実践研究を目的とはしていない。

「アウトリーチ型キャリア教育」を扱う先行研究としては、音楽大学で学ぶ大学生が小学校でのアウトリーチ型演奏会を企画した事例を分析した壬生(2013)があるが、中学生を対象としたキャリア教育を扱う本研究とは趣旨が異なる。萱野他(2011)は、附属中学校に他大学の研究者をゲストティーチャーに招いた授業の事例を分析しているが、公立学校への汎用性については言及されていない。家庭科で中学生に希望職種を暫定的に決定させる実践を行った河崎・川端(2009)は、現職教員である院生が授業を行うことで「アウトリーチ型キャリア教育」と捉えられる。これは、小学校・

中学校段階で希望職種の「暫定的決定経験」がない者は、それがある者に比べて職業肯定感や積極性に欠け、「働くこと」自体を回避したがる傾向が認められることを指摘した川端・河崎(2008)の研究成果をふまえた実践であるが、高校生とその保護者を対象にしたキャリア教育に関する調査²⁾では、高校生の「希望進路」について、親子共に 9 割が高校生の「希望進路」を共有していると回答する一方で、保護者の「キャリア教育」という言葉の認知度は 42%に留まっていることから、キャリア教育の成果を保護者が認識できるような授業を設計することが有効であると考えられる。

これまで見てきたように、「アウトリーチ型キャリア教育」は教科学の枠組みで蓄積されているものの、学校のエデュケーション環境や地域・文化等の影響を加味した授業設計を行うことが有効であると考えられ、教育環境学の課題解決として「アウトリーチ型キャリア教育」の実践を分析することには意義があると考えられる。

(島田桂吾)

2.2. 本研究の概要

本研究の概要は次の通りである。本実践は、2014 年 12 月に S 中学校区での先行実践であるキャリア教育プロジェクトを受け、実施された。この先行プロジェクトの特徴は、小学生と中学生が教員・学術研究員・大学院生・保護者らと協働して、模造紙で親子が子どもの夢を確認しあうことから始まり、その夢を実現するための道筋を発見し、チャートを作っていくことで自らのキャリア・イメージを具体化していくことと、子ども自身が全員の前でその具体化したキャリア・イメージをプレゼンテーションすることでそれを共有することにあつた。

この先行プロジェクトの調査結果においては、受講したすべての子どもの、夢や職業を実現する方法についての理解が、事前より事後の方がより高い段階に高まったということが示唆された。また、外部の年長者との関わりや、数学・社会・情報・音楽・美術といった科目との関連分野における大学の専門的知見と、子どもの生活を日常的に支える地域住民との連携がキャリア教育のさらなる可能性を拓くことが示された。特に、子どもにとっては、夢や職業として「～になりたい」と思い描くことまではできても、実際にこれからの数年間でどのようなプロセスを選択し、実現していけばその

夢や職業に到達するのかまでは、理解することは難しい。しかし、このプロジェクトのような学びのなかに身を置いて、日常生活では親子で夢や職業について考えるゆとりがあまりなくても、それを自ら主体的に考えていくことで、どの子どもにも自分の持っている夢や職業に至る道筋への見通しを得る可能性があることが看取された³⁾。

このことは、親子での活動やコミュニケーションの深まりはもちろん夢や職業、進路を考える際には基盤となるものであることは疑いないが、その上でさらに専門知に基づく助言を得ることで、より満足度の高いものとなっていることを示唆している。

本実践はこの先行プロジェクトの見通しを受け、この構造を保持したまま、実施場所を S 中学校に設定し、2015 年 5 月 29 日と 6 月 5 日の二週に亘って S 中学校校長及び教員の協力を得て「総合的な学習の時間」を利用して実施された。

本実践の一週目には、キャリアや進路に関する資料を数多く用意し、あるいは図書室の資料を活用するだけでなく、S 中学校の協力により、ハローワークから詳細な職業別の資料を入手したり、またパソコン室でインターネット回線を利用して調べる準備を整えたりするなど、生徒のキャリアに対するあらゆるイメージ形成に対応可能な環境を整備した。こうした資料の多くは、生徒自身が自由に切り取ることを認め、生徒のプレゼンテーション資料作成に活用できることを保証した。

生徒はこれらの大量の資料に触れながら、大学教員・学術研究員・大学院生・中学教員・保護者と協働的にコミュニケーションをはかりながら、自らのキャリア・イメージを徐々に獲得していった。この際、教員らは子どもの声にできる限り耳を傾け、何ら命令することなく、生徒がキャリア・イメージを自由に描き出せるように留意した。イメージのわからない生徒に対しては、職業やキャリアを概観できるような資料を提示し、その中から希望のキャリアを見出せるように方向付けることも適宜行うように心がけた。

本実践の二週目には、生徒らは、前週までに獲得したキャリア・イメージを、同級生に加えて大学教員・学術研究員・大学院生・中学教員・保護者の前でプレゼンテーションした。前週に完成しなかった生徒も、S 中学校の協力により、この週末には全員プレゼンテ

ーション資料を完成させた。プレゼンテーション資料については、A1 サイズの模造紙 1 枚に多色ペンを使用したり図を用いたり、場合によっては資料の切り抜きを貼付けたりするなどの工夫を凝らしたものに仕上げる者が多かった。資料作成が初めてで戸惑う者のために、サンプルを用意して、それを参照しながら作成に取りかけられるように配慮した。プレゼンテーションは、一部の生徒だけでなく、全員が行えるように構成し、多様なキャリア・イメージの開陳によって豊かな可能性を感知できるように構成した。

2.3. 本研究の目的

以上が、本実践及び本研究の概要である。本実践の研究目的は主に二つある。ひとつは、保護者や地域住民が学校改善支援者として成長してゆける仕組みを開発しながら、児童・生徒の「生き抜く力」の獲得可能なプログラムをキャリア教育の枠組みの中で開発すること、もうひとつは、児童・生徒が本キャリア教育プログラムに参加することで、自らの将来に具体的なイメージを持つだけでなく、その将来を実現するための具体的なプロセスを獲得する力を身に付けることである。

前者の目的に関わる背景としては、2004 年の「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の改正によって、学校運営協議会を設置するコミュニティ・スクールが制度化されて以降、徐々に学校運営協議会を設置する学校は増加しているが、学校の教育に参画する保護者や地域住民が自らの教育力をスキルアップしながら、児童・生徒の成長を支援していくためには、保護者・地域住民と学校とが連携した教育プログラムの開発が求められていることがある。梶(2010)が学校運営協議会を設置した学校についての調査・分析から明らかにしているように、学校運営協議会の課題として、どちらも回答のうち 50%超を占めた「学校運営協議会の存在や活動が保護者地域に余り知られていない」や「会議の日程調整・準備に苦勞する」と並んで、40%を占めた「適切な委員の確保・選定に苦勞する」という回答が挙げられる⁴⁾。この調査・分析が示すように、地域住民や保護者の学校運営への参画意識の向上はコミュニティ・スクールを推進する上での課題となっていると言える。

そこで本研究では、大学がアウトリーチ型キャリア教

育として実施可能なプログラムを開発し、そのプログラムを地域住民・保護者・学校・大学で協働的に運営しながら、その成果と課題を検討することで、将来的にコミュニティ・スクールに主体的に参画し得る地域住民・保護者の教育力の充実に資することを目指すこととした。

後者の目的に関わる背景としては、児童・生徒にとって自らのキャリアを主体的に考える機会と比較的限定されており、自らのキャリアをめぐる保護者とのコミュニケーションの機会も同様に限定されていることが挙げられる。本研究では、自らのキャリアを主体的に見つめる機会となり得るプログラムを提供することで、キャリア・イメージを明確化すること、さらにそのイメージを実現するステップを具体的に明らかにできる技術を修得することを目指すこととした。

そもそも「キャリア」という言葉の語源は、厚生労働省も「キャリア形成の意義」を述べる際に言及しているように⁵⁾、中世ラテン語「*carraria*」＝「轍(わだち)」である。「轍」は本来「馬車が通った後にできる跡」を意味する言葉だが、これを人生に当てはめて「人が辿る行路やその足跡、経歴、遍歴」を意味することとなった。この「*career*」概念の決定的な特徴は、「保有者・保菌者・運び手」を意味する、自らの意思で形成・変更することが不可能である「*carrier*」という類似概念とは異なり、自らの意思によって形成・変更が可能な点にある。とりわけバブル経済崩壊後のわが国における経済状況の変化に応じる形でこの観点を導入し、従来のマッチング型の進路指導教育からキャリア発達を支援するキャリア教育への転換が目指されることとなった。実際 2004 年文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」においても、進路指導や職業教育と区別する形でキャリア教育の必要性が指摘されているが⁶⁾、リーマンショックを経た現在の状況に対応したあり方の模索が新たに求められている。

本研究では、アウトリーチ型キャリア教育プログラムの開発と、その分析・考察による効果の検証を通じて、地域住民・保護者の教育力の充実と児童・生徒に対するキャリア支援のあり方についての一定の示唆を得ることを目指したい。本研究における課題の大きな枠組みにおける目標としては、キャリア教育の方法・内容に関する具体的なモデルを提示し、教科開発学にお

いて教育学と教科学とを架橋する教育環境学の課題に応答することである。

(中村美智太郎)

3. 調査方法

3.1. 質問紙調査の概要

本研究では、本活動に参加した生徒及び活動を参観した保護者に対して、今回の取り組みがどの程度子どもたちのキャリア意識の促進に効果があったのか、また、子どもと保護者との間でどの程度キャリア意識に差があるのかを検証するため、二週目の授業後に質問紙調査を実施した。質問内容としては、日頃のキャリア教育の意識や本授業での感想を問うものであり、大きく四つのカテゴリに分類した。それぞれのカテゴリは「A 普段の様子について」「B 授業について」「C 大学教員・大学院生との活動について」「D 学校への支援について」である。これら一つのカテゴリにつき五つの質問項目を設けており、A 及び B の質問項目については、生徒と保護者で対応した内容に設計した。得られた回答は、生徒 37 名(男子 18 名、女子 19 名)、保護者 30 名の計 67 名であり、有効回答率は 100%であった。

(酒井郷平)

3.2. 調査票の構成

調査票は生徒用と保護者用の二種類を用意し、無記名で回答を得る形式を採った。調査票はカテゴリ A から D を含む問 1 と、自由記述を含む問 2 から構成されている。問 1 では、各質問において五件法を採用し、問 2 の自由記述では今回の授業について自由に感想を述べてもらい、最後に、今後同様の取り組みがあった際にまた参加したいかの意識を「はい・いいえ・どちらともいえない」から問う選択式とした。

問 1 を構成する四つのカテゴリはそれぞれ以下の意図を持つ。まず、カテゴリ A・B は将来の夢・職業に対し親子間に意識のギャップがあるかを浮き彫りにするもので、カテゴリ C はアウトリーチ型キャリア教育が生徒と保護者にもたらす効果を測るために設定された。さらに、カテゴリ D は、アウトリーチ型の実践が学校と地域の連携の推進に寄与するものであるかを問うことが目的であった。

調査に際し、対象校には本調査の目的や、調査へ

の参加は自由意志であること、個人情報に配慮して回収された調査票を扱うことなどについて倫理的に配慮する旨を説明し、同意を得た上で調査を実施した。

(田中奈津子)

3.3. 分析の方法

質問紙調査により、生徒、保護者から得られた回答を集計した結果図 1～図 8 のようになった。この結果に対する分析手法として t 検定及び χ^2 検定を用いた。また、授業の感想の自由記述に対して、共起分析を行った。この分析方法を用いることにより、複数の自由記述に対して回答全体を概観できる。以上の分析を用いることにより、得られた効果や課題について述べていく。尚、グラフと表におけるパーセンテージの表記については調査対象者の人数が少ないことから整数値での表記とした。

(酒井郷平)

4. 調査結果

4.1. 生徒と保護者のキャリア意識について

(1) キャリア意識のギャップ

表1は t 検定の結果である。その結果、「A2 (お子様は) 将来の夢・職業を持っていますか(持っていると思いますか)」「A3 今、学校や塾で学んでいることが、将来の自分(お子様)の夢・職業につながっていると考えていますか」「A4 (お子様は) 将来の夢・職業に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか」の項目について、生徒と保護者との間で有意差が見られ、生徒の平均値の方が高かった。一方、「A1 将来の夢・職業について保護者の方に話すことがありますか」「A5 (お子様の) 将来の夢・職業を達成するための方法は知っていますか」の項目については、有意差は見られなかった。このことから、保護者が日頃感じているよりも、生徒は夢や職業について考えていたり、努力や工夫をしていると考えていたりする可能性や、逆に生徒自身が普段の生活において十分に努力をしていると過信している可能性も考えられる。すなわち、日頃のキャリア意識について生徒と保護者の間で現状の認識においてギャップが大きいことが示唆される。このことは、家庭で生徒のキャリアを考えていく際に生徒と保護者の意識の共有に課題があり、進路選択に弊害をもたらす可能性がある。そこで、

こうしたキャリア意識のギャップについて普段から意識し、生徒と保護者間で理解を深めることや方向性を調整していくことが、キャリア教育としての重要な視点の一つであるといえるだろう。

(2) 家庭における会話とキャリア意識

「A 普段の様子について」の質問項目に対して、家庭における保護者との会話と生徒のキャリア意識との関係性について明らかにするため、「A1 将来の夢・職業について保護者の方に話すことがありますか」の項目について「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた生徒 22 名と、「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と答えた生徒 15 名の 2 群に分類し、他の項目との間で χ^2 検定を行った(表 2)。その結果、「A4 将来の夢・職業に向かって努力したり、生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか」の項目について 5%水準で、「A5 将来の夢・職業を達成するための方法は知っていますか」の項目について 1%水準で有意な結果となった。このことから、普段から保護者とキャリアについての会話をすることにより、生徒は将来に向けての努力の仕方やそれらを達成するために必要な方法などを知識としてより強く共有していることが考えられる。こうしたことから、普段からの保護者との会話は子どもの将来の道筋を明確にすることに寄与すると考えられる。

4.2. アウトリーチ型キャリア教育の有効性について

(1) 生徒における有効性

生徒について、質問紙調査の回答結果から次の二つの有効性が明らかとなった。

一点目は、自己の進路の明確化である。図 2 からわかるように、全体的な回答の傾向として授業に対して肯定的なものが多くなっており、今回の授業を通して、生徒自身のキャリアについて考える機会を与えることが出来たと考えられる。特に、「B1 今後どのようなことをすれば良いかわかりましたか」「B2 今後の進路選択の役に立ちましたか」「B5 どのような勉強をすれば将来の夢・職業に到達できるかわかりましたか」の項目については、およそ 80% の生徒について「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」のいずれかの回答となっていることがわかる。このことから、改めて自己に顕在化している将来の夢や職業について図示するこ

とにより、やりたいことや興味のあることをより具体的に整理でき、また、それらへの道筋をより明確にイメージすることができたものと考えられる。

二点目は、大学教員や大学院生の参加による、多様な専門的知見を参考にできた点である。図3からわかるように、活動内容や大学教員・大学院生(コーディネーター)が活動へ参加したことについての質問項目への回答結果について、すべての項目において約80%の回答が肯定的なものとなっている。大学教員や大学院生が職業調べや模造紙へのまとめ活動に携わったことについて、生徒の大半が新鮮な経験であり、将来の夢・職業への道筋を考える手助けになったと回答していることから、キャリア教育において、学級担任のみでは職業に関する専門的知識に欠けるという課題について、外部からある程度専門的知見を持った講師が参画することは生徒のキャリア意識を高める活動において効果的であると考えられる。

以上の二点に加えて、他生徒や保護者の前で発表することによる効果についての有効性も付随的に明らかとなった。図3の「C3 将来の夢・希望について発表(プレゼン)することは考えをまとめる上で役に立ちましたか」の回答結果からわかるように、80%以上の生徒は発表する活動が考えをまとめる上で役に立ったと回答している。C4 からも、普段聞く機会のないクラスメイトの将来の夢や職業について聞くことにより、知らなかった職業を知ることやこれまで考えなかった将来への選択が広がることが期待できる。

一方で、若干名ではあるが模造紙へ考えをまとめる活動や人前での発表について否定的な意見も見られた。この結果を踏まえると、クラスメイトや保護者の前で発表することに少なからず抵抗感があつたことが推測される。このような生徒の抵抗感はアウトリーチ型の課題として考えられる一方で、これを改善していくためにもまとめる作業のみに留まらず、人前で発表する経験を積み重ねることで抵抗感を減らしていくことが重要であると考えられる。

以上の点が、本実践の生徒に対する効果であつたと考えられる。

(2) 保護者における有効性

保護者についても、質問紙調査の回答結果から次の二点の有効性が明らかとなった。

一点目は、本実践のような学校の活動へ保護者が参画することにより、今後の活動への参加意欲がみられた点である。本研究の目的にもあるように、将来的にコミュニティ・スクールに主体的に参画し得る地域住民・保護者の教育力の充実に資するためにも、今回のような学校現場への地域住民の参画は必要不可欠である。

図7(C)の回答に関する以上の考察からは、今回のようなアウトリーチ型授業実践方法やその効果について、保護者が有効性を感じているという認識が得られたが、それが図8(D)の回答に反映されている。

たとえば、「D3 今回のような保護者と子どもが一緒に参加する授業は地域の活性化につながると思いませんか」、「D4 保護者と子どもが一緒に授業へ参加することは、よいと感じますか」という質問に対して、それぞれ半数近くが「とてもよくあてはまる」と回答しており、「だいたいあてはまる」と合わせると80~90%にのぼる。このことから、保護者の参加、外部の人間との協働といった開かれた授業形式に対して保護者は極めて肯定的であり、同時に、学校の中での取り組みに対し、その枠を越えた地域への波及効果も期待していることがうかがわれる。

その一方で、今回の経験を通じて保護者が個人として学校での活動に積極的に協力できるかが問われたD1, D2の質問に対しては、「とてもよくあてはまる」という回答は20%台に留まった。このことは、D3, D4の質問内容に対し、保護者個人の意識・力量が問われていることに要因があると考えられる。今回のような授業に協力することが地域の活性化や地域住民の学校改善力の向上につながることは理解しながらも、個人としての協力にはまだためらいがあることが推測される。

それでも、調査票の最後の質問である「またこのような授業があつたら参加したいと思いますか」に対しては、90%の保護者が「はい」と回答しており、子どものキャリア形成に対する保護者の意識や、子どもと情報を共有できる機会に対する需要が高いことが明らかとなり、また、地域活性化のツールとしてもこうした授業が機能する可能性が示唆された。

二点目は、自分の子どもや他者の子どものキャリア意識の様相について保護者が認識できた点である。3-4(1)で述べたように、生徒と保護者の間にキャリア

意識に関するギャップが見られることがキャリア教育の課題として指摘される。これに対して、授業後の質問紙調査の結果(図 5, 図 6)からわかるように、今回の授業に参加したことが今後の子どものキャリア形成に関して効果的であったかを問う項目全てに対して、「とてもよくあてはまる」「だいたいあてはまる」の回答が70~90%という高い割合であった。

特に、「B1 この授業に参加して、お子さんに今後受けさせたい教育についての理解は、深まりましたか」という項目では、「とてもあてはまる」が40%と、5項目のうち最も高く、今回の授業が保護者に対しても有益であると受け止められていることがうかがわれる。

また、生徒が個人で自分の将来の夢・職業を紙にまとめる活動、人前で発表する活動それぞれについても効果的であるという認識が強く、「C2 模造紙に将来の夢・職業への道筋を作っていく活動は、これからの進路を明確にする効果がありましたか」という質問には、「とてもよくあてはまる」が約40%であり、「C3 将来の夢・職業について発表(プレゼン)をすることはお子さんや保護者の方の考えをまとめる上で役に立ちましたか」には、やや増えて50%が「とてもよくあてはまる」と回答した。C3において「とてもよくあてはまる」の回答率がわずかながら上昇したのは、プレゼンテーションの有効性が子どもに対してだけでなく、保護者に対しても問われていることに起因していると考えられる。以上の点から、保護者が子どもの発表を聞くことにより、子どもの持つ将来の夢や職業への考えを知ることができ、また他の生徒の発表を聞くことにより、自分の子どもとのキャリア意識の比較をすることができたと推測される。

以上の点から、今回の取り組みは保護者に対しても、学校運営意識の向上に関して有効性があつたと考えられる。

(酒井郷平・田中奈津子)

5. 考察

5.1. 共起分析の結果による考察

授業の感想についてこれまでに述べた質問紙調査の結果を踏まえ、考察を行っていく。考察の際には、特に出現回数が多かった単語、または単語間の共起が強い単語を中心に考察を行っていく。まず、生徒の記述についての分析結果(図 9)は、共起ネットワーク

の中心語句として「自分」「明確」が示されており、それらと関連の強い語句として「夢」「職業」「考える」「なる」が示されている。このことから、本授業の効果として、生徒の持つ夢や職業についてより明確に考えさせることが挙げられる。これに関する具体的な記述としては「今回の授業で自分の将来の夢が明確になってよかった。みんなの意見を聞いて少し考えることもあり、いい体験だった」「自分やクラスみんなの将来の夢が明確にわかり、いい体験になったと思います」「自分の夢について、どうすればなれるかなど職業への道筋とかが分かったので良かったです」(原文ママ)といった感想が見られた。また、「伝える」「就く」「見つかる」「機会」「考え」の語句も関連性が見られており、実際に模造紙へまとめる作業や他者へと伝える作業を通して、改めて将来について考える機会になったことが示唆される。

また、「大学教員や大学院生と一緒に活動できて知らなかったことも分かっていい経験になった」といった記述から見られるように、外部からスタッフが参加したことについて肯定的に捉えた感想も見られた。この点から、単に学校の教員が指導するだけではなく、外部から専門性のある講師が活動に加わることにより、より具体性のある将来へのイメージを持てた可能性がある。これらの結果より、授業を通して生徒は将来の自分の目標をより明確にイメージしており、さらに発表をさせる活動により他生徒の夢や目標の共有、発表準備におけるビジョンの整理が行えたと考えられる。

次に、保護者について分析結果(図 10)の考察を述べていく。保護者における共起ネットワークでは、共起ネットワークの中心語句に「他」「聞く」「考える」が強く示されており、これらの関連語句として「お子様」「共々」「親子」「自分」などの語句が関連性を示している点である。保護者が授業を参観できる授業形態にしたことにより、自分の子どもだけでなく、他の生徒の発表を聞くことで、改めて子どものキャリアについて考え直す機会になった可能性が考えられる。具体的な記述としては、「自分の子どもの話は聞いていたが、今回他の子の考え、発表を聞き、とても参考になりました」「普段、家ではあまり会話がなかったのでこのような機会で本人の夢が聞けてよかったです。他の子の夢も素晴らしいと思いました」「普段の会話にはなかったような内容を聞けてよかったです」という感想が見られたように、

普段なかなか将来の夢や目標について話すきっかけを持ちづらい家庭についてもこうした発表機会を設けることで、親子で情報を共有できる機会になったと考えられる。

また、「思う」「知る」「職業」の語句についても出現回数が多くなっている。これについて、生徒の発表を通して、保護者自身も職業について知ることができたことが示唆される。

以上の点を踏まえ、保護者についても今回の授業において子どもの持つ目標の認識やそこに行き着くまでの道筋を共有できたことが成果として挙げられる。

(酒井郷平)

5.2. アンケート分析結果に基づく総合的考察

本プログラムへの参加という限定的な範囲ではあるが、それを通じて、参加した生徒は、それまで漠然としていた自らの将来に対するイメージをより具体的な形態へと展開することが可能となったとみることができる。このことは、アンケート調査の結果からもうかがえた。

また、本研究において特筆すべき点は、このキャリア教育プログラムの実践に、大学教員及び大学院生を中心とした年長者の導きや高等教育で得られる知見を関与させることで、生徒の日常的な視点にいわば非日常的な視点をもたらし、そのことを通じてイメージの具体化を加速させる点にある。本実践が「総合的な学習の時間」の枠組みで実施されたことも、あえて社会や理科といった既存の教科と結合させないことで、教育環境において調べ学習や他者とのコミュニケーションを前景に置くことでより活発化し、教育環境学の課題への応答可能性を高めた。

特に思春期の子どもと保護者との関係においては、進路や夢といった子どものキャリアのイメージを共有することが困難になりがちである。普段から保護者と話すことはもちろん重要だが、こうした状態を乗り越えるためには、アウトリーチ型キャリア教育を導入することによって、キャリア教育それ自体が実質的に活性化することも必要である。また、具体的なキャリア・イメージを描きにくい生徒にとっても、他の生徒の多様なキャリア・イメージ群をプレゼンテーションの場で共有できることは、一定の有効性を持ち得る。このことは、保護者にとっても同様の効果を持つ。すなわち、保護者の視野もより具体的に広がることが可能となる。

本研究においてアウトリーチ型という方法を採用した狙いはここにあり、アンケート結果からもこのことが示唆された。本研究では調査対象数は少ないため、一般的傾向を導出するまでは至らないが、限られた対象からでも構造化を試みることで、生徒の語りの中に将来へのイメージを獲得する要素を見出し、授業実践全体を通じて、そのイメージを支える要素についての示唆を得ることを目指した。

授業実践の柱のひとつとして、生徒によるプレゼンテーションの場においては、他者を受け入れることが重視された。すなわち、同級生が苦勞して獲得したキャリア・イメージを、それがどんなに稚拙に見えようと、それを拒否するような姿勢ではなく、それを肯定し、むしろ同級生を勇気づける姿勢が重視された。プレゼンテーションに際しては、他者のキャリア・イメージが自己のものとは異なっていることを前提としてそれを強調し、他者の形成したキャリア・イメージを肯定的に受け止めることができることを目標とした。この目標は、生徒だけでなく、保護者を含むレシーバー全員に共有されることも目標とした。生徒にとってキャリア・イメージの形成とそのプレゼンテーションの際の障壁となり得るのは、同級生だけでなく周りの大人の拒絶であろうと目されたからである。この環境整備もまた、アウトリーチ型という方法に基づく産物であると言える。

(中村美智太郎)

6. 結論

筆者らは、大学の人的・専門的資源に基づいたアウトリーチ型のキャリア教育を中学校において行う実践研究に取り組んだ。

本研究を行うにあたり二つの目的を設定した。一つは、大学が開発したキャリア教育プログラムを、地域住民・保護者・学校・大学が協働的に運用しながら、その成果と課題を検討することで、将来的にコミュニティ・スクールに主体的に参画する地域住民・保護者の教育力の充実に資することであった。もう一つは、生徒がキャリア教育プログラムに参加することで、自らの将来に具体的なイメージを持つだけでなく、その将来を実現するための具体的なプロセスを明らかにする力を身に付けることであった。

これら二つの目的に即して、生徒が教員・学術研究員・大学院生・保護者らと協働して、キャリア・イメージ

を具体化していくことと、生徒自身が全員の前でその具体化したキャリア・イメージをプレゼンテーションすることで、それを共有する実践を行った。その際、先行実践に参加した保護者が本実践の有力なアドバイザーの役割を発揮できるよう配慮し、実践を行った。

その結果、生徒については今回の授業によって将来の夢や職業への道筋をより明確にイメージすることができた点で、効果的であったことを明らかにした。保護者にとっても、外部の人間との協働という開かれた授業形式について、肯定的であるだけでなく、さらに、保護者と子どもが一緒に参加する授業は、地域活性化のツールとしても機能する可能性を示唆することができた。

以上により、今回のキャリア教育の方法・内容に関する具体的なモデルの提示は、大学教員及び大学院生等を中心とする大学の専門的知見を関与させる中で、中学生が自らの将来に対するイメージをより具体的な形態へと発展させることを確認できたことから、教育環境学の進展に寄与するものと考ええる。

一方、中学 2 年生という発達段階から、進路についても悩みや自分の考えを人前で発表することへの抵抗感があつたと推測される。このような抵抗感を減らしていくことが、今後のアウトリーチ型の取り組みの課題である。

また、本実践では調査対象数が少ないことから、今後他の学校でも本研究の成果を踏まえた実践を行い、検証の精度を高めることが求められる。その際、実施する学校種としては、本研究が対象としたように、将来の進路を具体的に考え始める中学校が望ましい。

(三ッ谷三善)

7. 引用文献

- 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 2013『第6回 高校生と保護者の進路に関する意識調査報告書』
- 白木悦生・田中宏和 2009「主体間相互支援モデルによる地域連携型キャリア教育の在り方に関する考察—東京・大田区の中学校の事例研究から—」『キャリア教育研究』第28巻第1号, 1-8 頁
- 萱野貴広・熊野善介・長友信也・池谷渉・斎藤昭則 2011「中学校におけるキャリア教育実践プログラムの開発:理科」『静岡大学教育学部研究報告. 教科教育学篇』第42号, 119-131 頁
- 川端亜紀子・河崎智恵 2008「大学生のライフストーリーにみるキャリア決定プロセス」『奈良教育大学紀要 人文・社会科学』第57巻第1号, 181-190 頁
- 河崎智恵・川端亜紀子 2009「卒業後のキャリア発達に寄与するキャリア教育の検討—中学校におけるキャリア教育プログラムの作成—」『学校教育実践研究』第1号, 39-48 頁
- 国立教育政策研究所編 2014『教員環境の国際比較—OECD 国際教員指導環境調査 (TALIS) 2013 年調査結果報告書』, 明石書店
- 小松祐貴 2012「中学校理科におけるキャリア教育の実践: 理科の授業で地域の職業人を有効活用するための方策」『教育実践研究』第22号, 147-152 頁
- 佐藤晴雄編著 2010『コミュニティ・スクールの研究—一学校運営協議会の成果と課題』, 風間書房
- 静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター 2015『平成26年度一般社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム学術研究助成 静岡県民の学校改善力育成に向けたプログラム開発事業報告書』, 7-25 頁
- 辰巳哲子 2013「キャリア教育の推進に影響を与えるカリキュラムマネジメント要素の検討—全国の中学校に対する調査分析結果から—」『キャリア教育研究』第31巻第2号, 37-44 頁
- 橋本祥夫 2011「キャリア教育を中核に据えた中学年社会科のカリキュラム改善」『教育実践研究紀要』第11号, 21-30 頁
- 文部科学省 2006『小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き—一人一人の勤労観, 職業観を育てるために』
- 山田智之 2011「職場体験による中学生進路成熟及び自律的高校進学動機の変容と影響要因」『キャリア教育研究』第30巻第1号, 1-14 頁
- 山田智之 2013「中学校3年生の自律的高校進学動機の変容」『キャリア教育研究』第33巻第1号, 1-14 頁

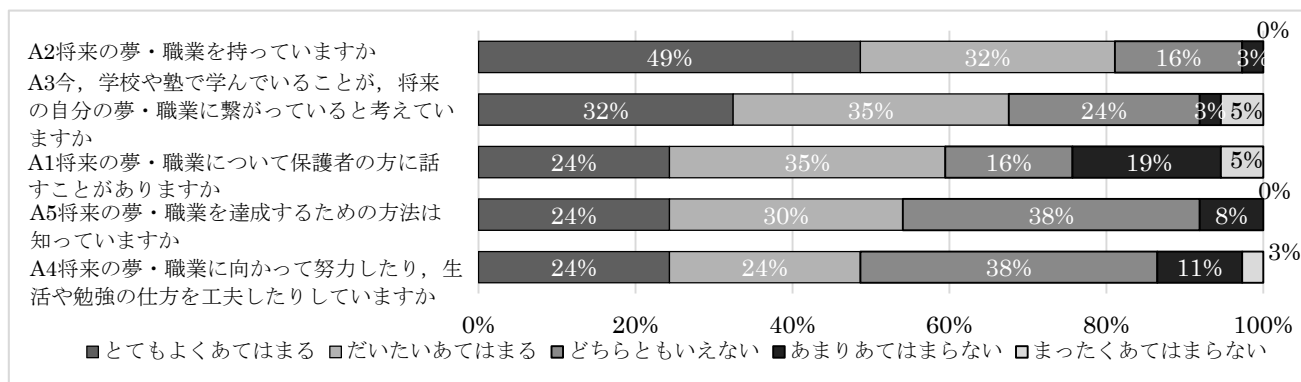


図1 「A 普段の様子について」集計結果 (n=37)

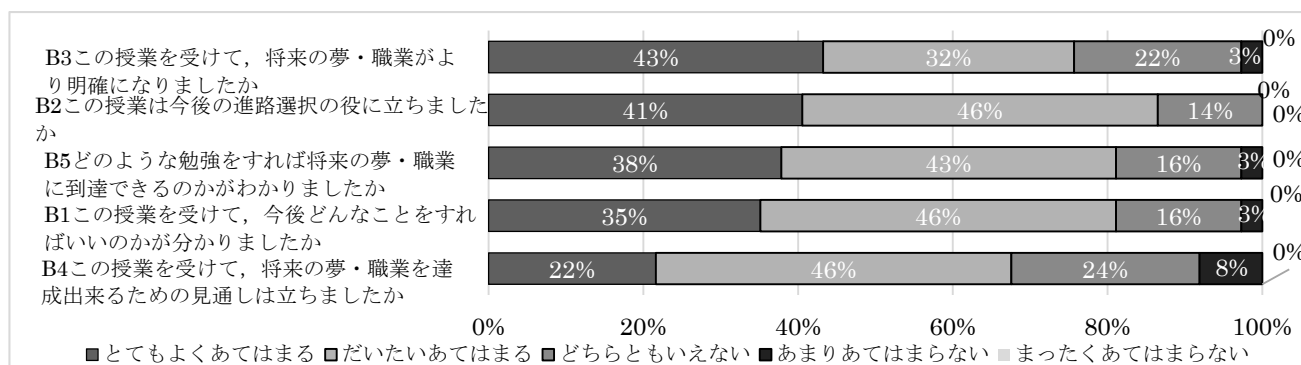


図2 「B 授業について」集計結果 (n=37)

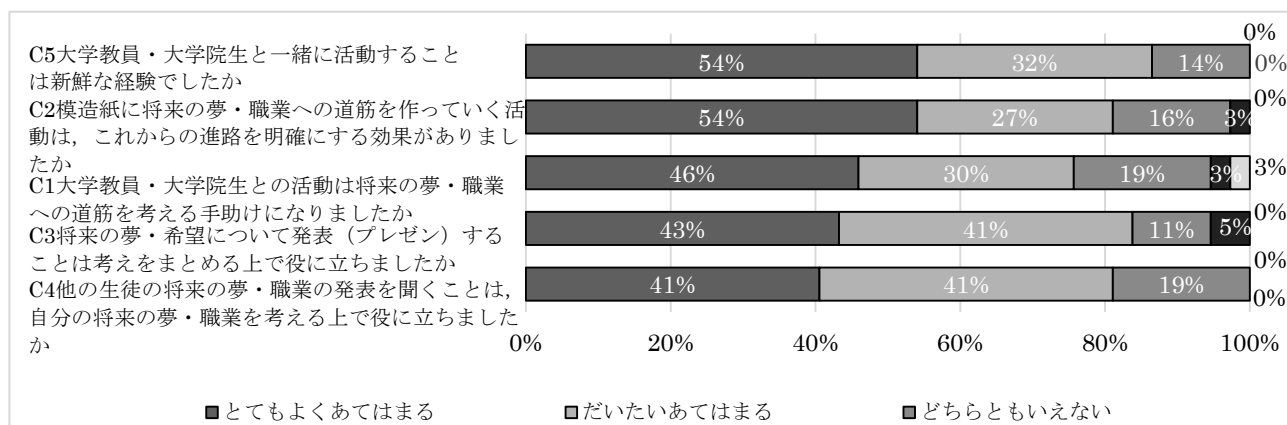


図3 「C 活動内容や大学教員・大学院生との活動について」集計結果 (n=37)

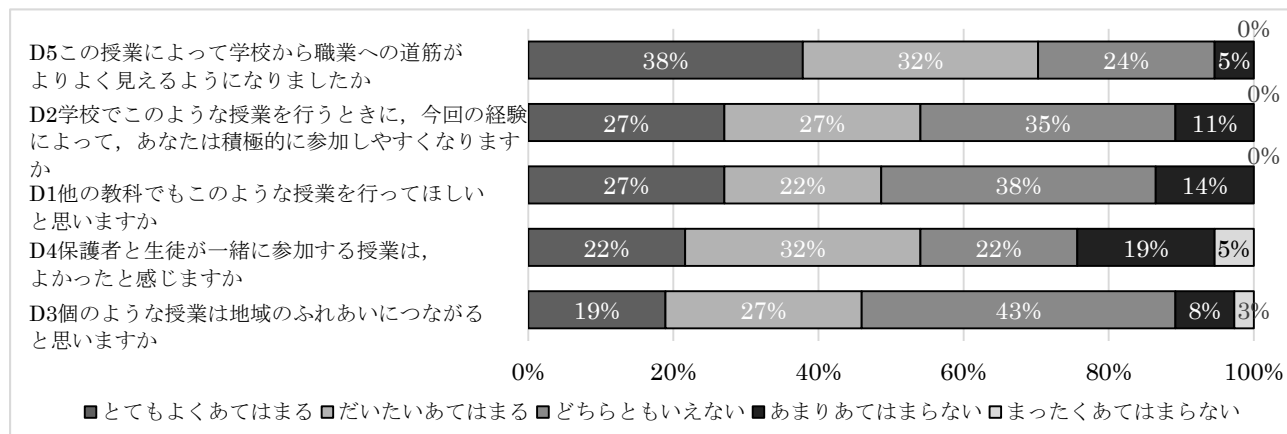


図4 「D 学校への支援について」集計結果 (n=37)

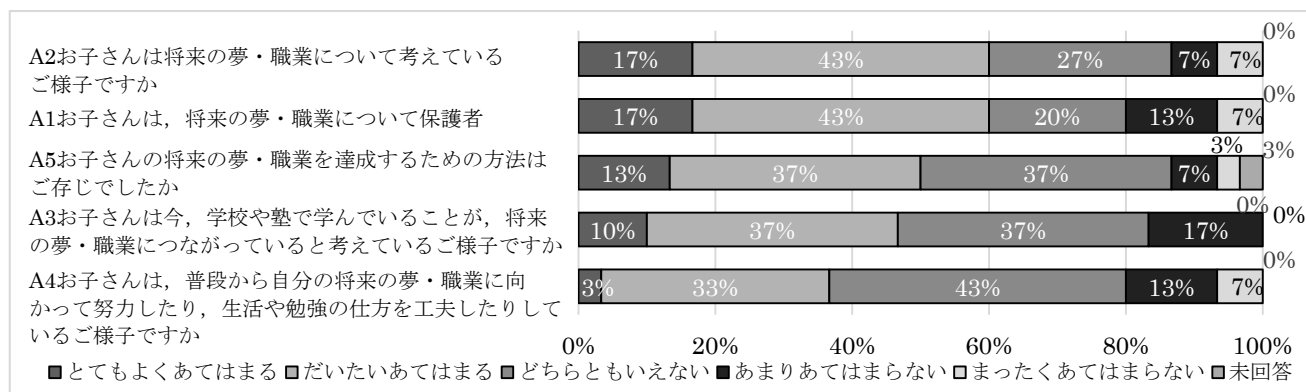


図5 「A 普段の様子について」集計結果 (n=37)

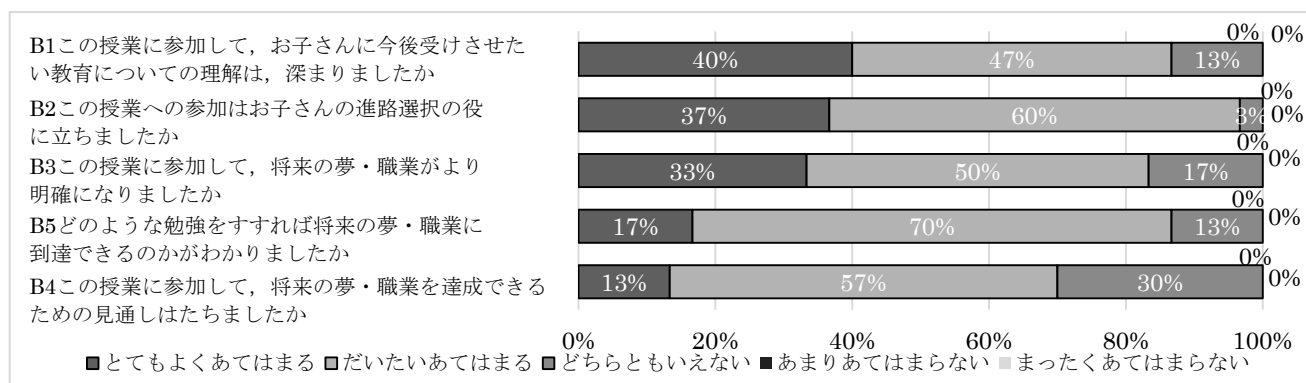


図6 「B 授業について」集計結果 (n=37)

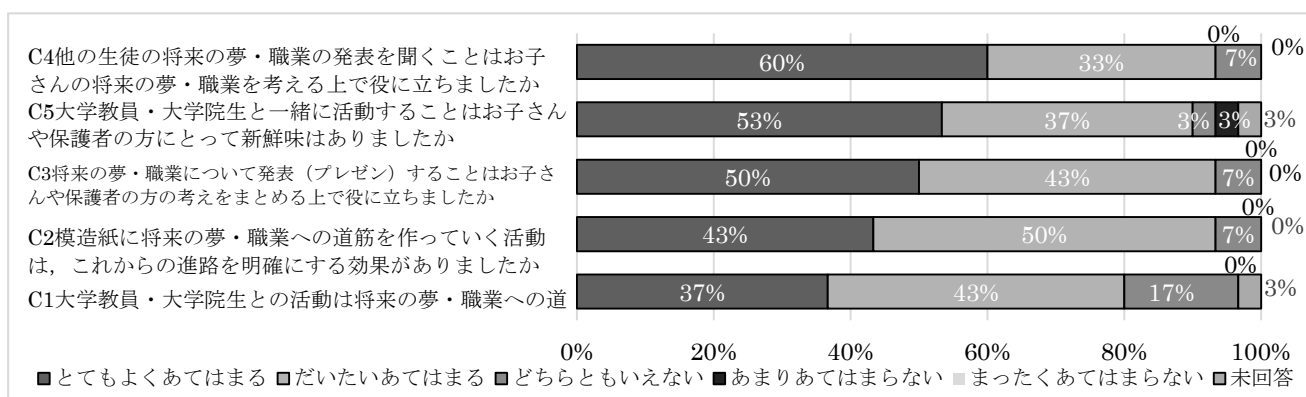


図7 「C 活動内容や大学教員・大学院生との活動について」集計結果 (n=37)

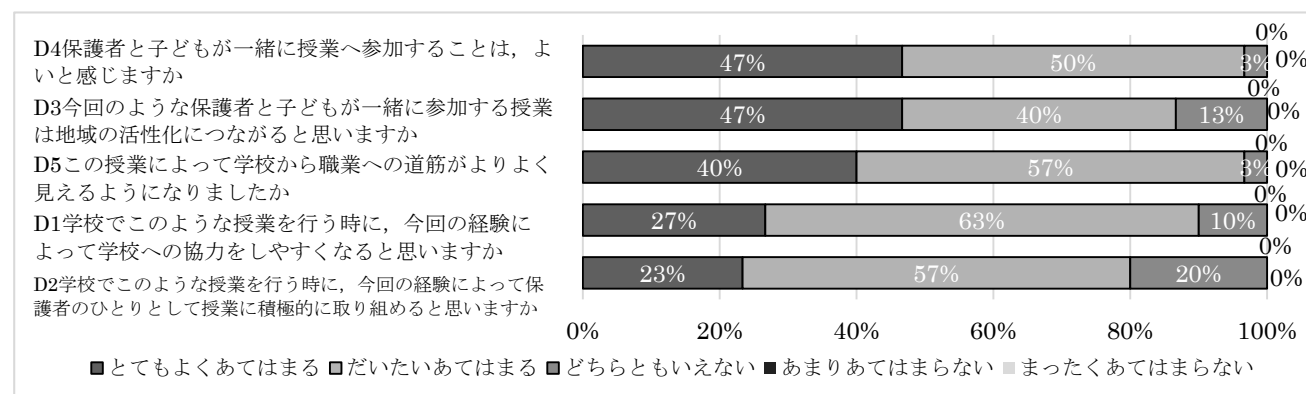


図8 「D 学校への支援について」集計結果 (n=37)

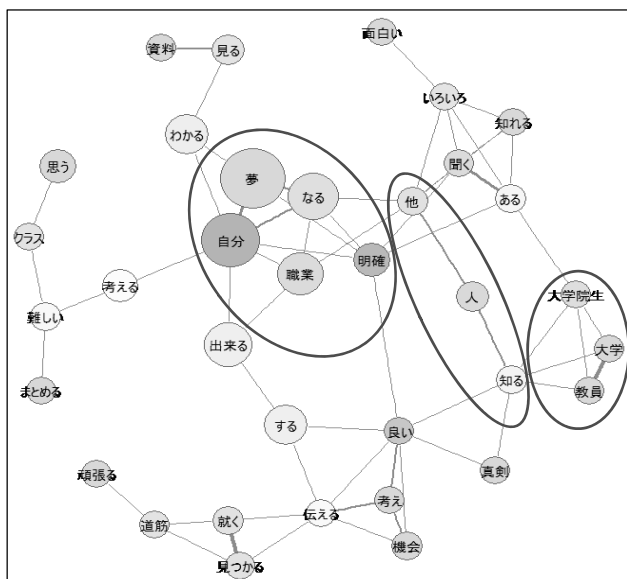


図 9 共起分析結果【生徒】(n=37)

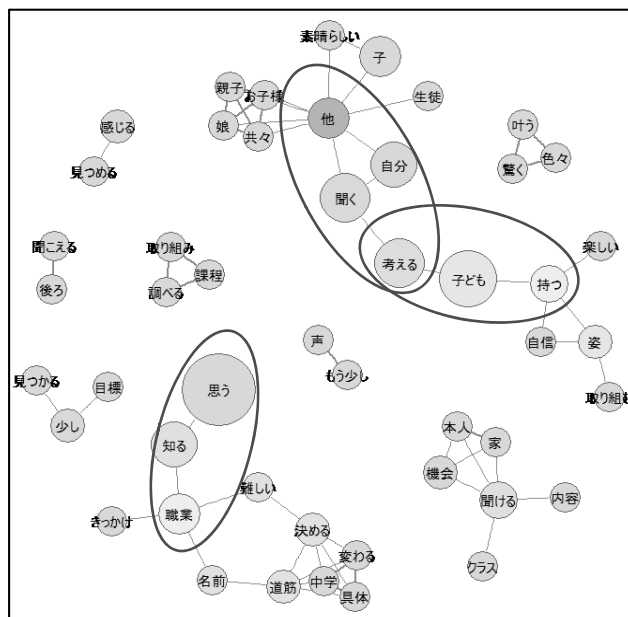


図 10 共起分析結果【保護者】(n=30)

表 1 生徒と保護者における平均値の差の検定結果 (n=67)

調査項目	生徒(n=37)		保護者(n=30)		t値
	平均	S.D.	平均	S.D.	
A1. 将来の夢・職業について保護者の方に話すことがありますか	3.54	1.22	3.50	1.14	0.14
A2. (お子様は) 将来の夢・職業を持っていますか(持っていると思いますか)	4.27	0.84	3.57	1.07	3.01 **
A3. 今, 学校や塾で学んでいることが, 将来の自分(お子様)の夢・職業につながっていると考えていますか	3.86	1.08	3.40	0.89	1.88 *
A4. (お子様は) 将来の夢・職業に向かって努力したり, 生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか	3.57	1.07	3.13	0.94	1.75 *
A5. (お子様の) 将来の夢・職業を達成するための方法は知っていますか	3.70	0.94	3.52	0.95	0.79

*p<.05 **p<.01

表2 日常における生徒と保護者の会話とキャリア意識に関する χ^2 検定結果 (n=37)

	保護者と話す (n=22)		保護者と話さない (n=15)		χ ² 値	P 値
	とてもあてはまる すこしあてはまる	あまりあてはまらない まったくあてはまらない どちらともいえない	とてもあてはまる すこしあてはまる	あまりあてはまらない まったくあてはまらない どちらともいえない		
A2 将来の夢・職業を持っていますか	20 (54%)	2 (5%)	10 (27%)	5 (14%)	3.42	0.06
A3 学校や塾で学んでいることが、 将来の自分の夢・職業に繋がって いると考えていますか	16 (43%)	6 (16%)	9 (24%)	6 (16%)	0.66	0.42
A4 将来の夢・職業に向かって努 力したり、生活や勉強の仕方を工 夫したりしていますか	14 (38%)	8 (22%)	4 (11%)	11 (30%)	4.88	0.03 *
A5 将来の夢・職業を達成するため の方法を知っていますか	16 (43%)	6 (16%)	4 (11%)	11 (30%)	7.62	0.01 **

*p<.05 **p<.01

なお本論文では分担執筆を行っているが、本研究はその全体を通じて執筆者全員が関わり、共同研究を行った成果である。

謝辞

本研究における実践にあたり、S中学校校長先生をはじめ教員・保護者・関係者の皆さまにご協力頂きました。深く感謝申し上げます。

脚注

- 1) 「親子で夢づくり講座」の実践および検証は、下記報告書により示されている。
静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター(2015), 7-25 頁。
- 2) 詳しくは、一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ(2013)を参照のこと。

- 3) この成果については、数量的にも裏付けられている。次を参照のこと。静岡大学教育学研究科附属教員養成・研修高度化推進センター(2015), 11 頁以下。
- 4) 梶輝行「学校運営協議会における『意見』の実態と運営上の課題」, 佐藤晴雄編著(2010)所収, 88 頁以下。
- 5) 厚生労働省 2002 『キャリア形成を支援する労働政策研究会報告書』(2015 年 8 月 11 日アクセス)。
(<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/07/h0731-3a.html>)
- 6) 文部科学省 2004 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」14 頁以下(2015 年 8 月 11 日アクセス)。
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002/010.pdf)